

第20回 子どもの本この1年を振り返って 2019年



本資料の一部または全てを無断で転載・複製・加工することは固くお断りいたします

■おすすめ図書リストの見方

★	小低	『なまえのないねこ』/竹下 文子・文, 町田 尚子・絵/小峰書店/2019. 4/ ¥1500/(絵本)
---	----	---

特におすすめの図書は★で表示。「おすすめ図書紹介」で紹介しています

その図書に相当と思われる利用対象を表示しています

□図書の利用対象について
利用対象の表記は以下の通りです。

「幼」=幼年

「中学」=中学校

「小低」=小学校低学年

「高校」=高校

「小中」=小学校中学年

「小高」=小学校高学年

□表記順について

各図書は、『書名 副書名 (あれば)』(シリーズ名 (同左)) / 責任表示 / 出版社 / 版年 / 金額 (本体価格) / 分類 の順で記載しています。

絵本

	幼	『かわにくまがおっこちた』/リチャード・T. モリス・著, レウイン・ファム・絵, 木坂 涼・訳/岩崎書店/2019. 8/¥1500/(絵本)
--	---	--

上下巻・全集などの場合

★	小高	『はじめての万葉集 上』/萩原 昌好・編, 中島 梨絵・絵/あすなろ書房/2019. 7/¥1600/(911. 12)
---	----	--

	小高	『プログラミングガールズ! 1 ルーシーなぞのメッセージを追え』/ステイシア・ドイツ・作, 美馬 しょうこ・訳, 高橋 由季・絵, 石戸 奈々子・監修/偕成社/2019. 7/¥1200/(933. 7)
--	----	--

『書名 巻数 副書名 (あれば) 巻書名 (同左)』(シリーズ名 (同左)) / 責任表示 / 出版社 / 版年 / 金額 (本体価格) / 分類 の順で記載しています。

本資料に掲載された「おすすめ図書リスト」は、「子どもの本2019」各選者の判断に基づき、お薦め図書として選書されたものです。

選書された図書の内容について保証もしくは宣伝するものではありませんので、図書リストは「おすすめ図書紹介」と併せてご覧いただき、皆様ご自身の判断に基づいて、ご参照くださいますようお願いいたします。

公益財団法人図書館振興財団

第20回 子どもの本 この1年を振り返って 2019年 おすすめ図書リスト

■絵本の部■

一般社団法人 日本子どもの本研究会 絵本研究部 五十嵐 静江

はじめに

小学生以上の絵本に、テーマや表現などに多様性、斬新さがあり、絵も美しく洗練されている、と感じるものが多数見られた。一方、幼児の絵本は、絵のかわいらしさや奇抜さで目をひいたり、ストーリーがありきたりだったり、魅力を感じるものが少なかった。

言葉が多すぎる、文が長すぎると感じる絵本もあった。文章量で、対象を考えてしまうこともあるので、もう少し短ければ、年齢が低い子どもたちも楽しめるのでは、と思った。

子どもの学習に役立てようという意図でつくられた絵本が増えている。

動物や宇宙をテーマにした絵本は、フィクションとノンフィクションが融合され、興味をひかれるものが多かった。

平和への願いが込められた絵本が、多数出版されている。絵本や児童文学以外の作家の作品も見られる。

長らく品切れや絶版になっていた絵本が、数多く復刊された。内容が改訂されたり、表紙や訳が変わったものもあるので、読み比べをして欲しい。

- ◆繰り返しが楽しい幼い子の絵本
- ◆ストーリー展開が楽しい冒険絵本
- ◆子どもの遊びや日常を描いた絵本
- ◆子どもの気持ち、戸惑いや頑張りを描いた絵本
- ◆いろいろな家族、いろいろなできごと
- ◆動物が活躍するユーモラスな絵本
- ◆絵に注目
- ◆平和への願いを込めた絵本
- ◆暮らし、今・昔
- ◆伝記絵本
- ◆地球・宇宙がステージ
- ◆小さくても大きくても、命ってすごい
- ◆ABC絵本
- ◆復刊など

■繰り返しが楽しい幼い子の絵本

★	幼	『あついあつい』(幼児絵本シリーズ)/垂石 眞子・さく/福音館書店/2019. 6/¥900/(絵本)
★	幼	『ながーいはなでなにをするの?』(幼児絵本ふしぎなたねシリーズ)/齋藤 槇・さく/福音館書店/2019. 5/¥900/(絵本)
	幼	『おもちさんがね…』(おいしいともだち)/とよた かずひこ・さく・え/童心社/2019. 10/¥850/(絵本)
	幼	『おはようおはよう』(はじめてのちいさなえほん)/こわせ たまみ・作, 長野 ヒデ子・絵/鈴木出版/2019. 2/¥361/(絵本)
★	幼	『おつきさまひとつずつ』(童心社のおはなしえほん)/長野 ヒデ子・作/童心社/2019. 9/¥1300/(絵本)
	幼	『かめくんのさんぽ』(こどものとも絵本)/なかの ひろたか・さく・え/福音館書店/2019. 4/¥900/(絵本)

■ストーリー展開が楽しい冒険絵本

★	幼	『フニをつかまえたこざるのおはなし』/メイ・ダランソン・文, ケルスティ・チャプレ・絵, ふしみ みさを・訳/徳間書店/2019. 4/¥1500/(絵本)
	幼	『かわにくまがおっこちた』/リチャード・T. モリス・著, レウイン・ファム・絵, 木坂 涼・訳/岩崎書店/2019. 8/¥1500/(絵本)
★	小低	『アレックスとまほうのふね』/キャサリン・ホラバード・文, ヘレン・クレイグ・絵, こだま ともこ・訳/徳間書店/2019. 5/¥1500/(絵本)
★	小低	『アーサー王のひひひひまご』/ケネス・クレーグル・作, 津森 優子・訳/瑞雲舎(発売)/2019. 10/¥1500/(絵本)
	小低	『せかいいちしあわせなクマのぬいぐるみ』/サム・マクブラットニィ・文, サム・アッシャー・絵, 吉上 恭太・訳/徳間書店/2019. 10/¥1600/(絵本)
★	小低	『かわうそモグ』/小森 香折・文, 長谷川 義史・絵/BL出版/2019. 5/¥1400/(絵本)
	小低	『なかよしの水 タンザニアのおはなし』/ジョン・キラカ・作, さくま ゆみこ・訳/西村書店/2019. 9/¥1500/(絵本)
★	小中	『ノロウェイの黒牛 イギリス・スコットランドのむかしばなし』/なかがわ ちひろ・文, さとう ゆうすけ・絵/BL出版/2019. 3/¥1600/(絵本)

■子どもの遊びや日常を描いた絵本

★	小低	『タコヤン』(日本傑作絵本シリーズ)/富安 陽子・ぶん, 南 伸坊・え/福音館書店/2019. 6/¥1300/(絵本)
★	小低	『えらいこっちゃんのいちねんせい』/かさい まり・文, ゆーち みえこ・絵/アリス館/2019. 1/¥1300/(絵本)

★	小低	『メイがはじめてがっこうへいくひ』/ケイト・ベアビー・ぶん・え, 中井 貴恵・やく/イマジネイション・プラス/2019. 2/¥1500/(絵本)
★	小低	『チェックおばあちゃんがくれたたいせつなつつみ』(世界傑作絵本シリーズ)/イ チュニ・ぶん, キム ドンソン・え, おおたけ きよみ・やく/福音館書店/2019. 9/¥1500/(絵本)
	小低	『ソフィー、がっこうへいく』/パット・ジトロー・ミラー・文, アン・ウィルズドルフ・絵, 二宮 由紀子・訳/光村教育図書/2019. 1/¥1400/(絵本)
★	小中	『コレットのにげたインコ』/イザベル・アルスノー・作, ふしみ みさを・訳/偕成社/2019. 10/¥1400/(絵本)

■子どもの気持ち、戸惑いや頑張りを描いた絵本

	幼	『わたしねこがかいたいの』/ミシェル・ロビンソン・文, チンルン・リー・絵, 三原 泉・訳/岩崎書店/2019. 10/¥1400/(絵本)
	幼	『プールのひは、おなかいたいひ』/ヘウォン・ユン・作, ふしみ みさを・訳/光村教育図書/2019. 7/¥1400/(絵本)
★	小低	『おれ、よびだしになる』/中川 ひろたか・文, 石川 えりこ・絵/アリス館/2019. 12/¥1400/(絵本)
★	小低	『自転車がほしい!』/マリベス・ボルツ・文, ノア・Z. ジョーンズ・絵, 尾高 薫・訳/光村教育図書/2019. 7/¥1400/(絵本)
★	小低	『ひみつのビクビク』/フランチェスカ・サンナ・作, なかがわ ちひろ・訳/廣済堂あかつき/2019. 4/¥1600/(絵本)
	小低	『いまのわたしにできること』/リサ・パップ・作, 菊田 まりこ・訳/WAVE出版/2019. 4/¥1400/(絵本)
	小低	『だいすきな先生へ』(児童図書館・絵本の部屋)/デボラ・ホプキンソン・文, ナンシー・カーペンター・絵, 松川 真弓・やく/評論社/2019. 8/¥1400/(絵本)
	小低	『カルメラのねがい』/マット・デ・ラ・ペーニャ・作, クリスチャン・ロビンソン・絵, 石津 ちひろ・訳/鈴木出版/2019. 8/¥1500/(絵本)

■いろいろな家族、いろいろなできごと

	幼	『きょうなにしてた?』/はまの ゆか・さく/あかね書房/2019. 3/¥1300/(絵本)
★	小低	『なまえのないねこ』/竹下 文子・文, 町田 尚子・絵/小峰書店/2019. 4/¥1500/(絵本)
★	小低	『おにいちゃんとぼく』/ローレンス・シメル・文, フアン・カミーロ・マヨルガ・絵, 宇野 和美・訳/光村教育図書/2019. 2/¥1200/(絵本)
★	小低	『マチルダとふたりのパパ』/メル・エリオット・さく, 三辺 律子・やく/岩崎書店/2019. 3/¥1500/(絵本)

★	小低	『フォックスさんのにわ』(児童図書館・絵本の部屋)/ブライアン・リーズ・さく, せな あいこ・やく/評論社/2019. 10/¥1400/(絵本)
★	小低	『かぞくってなあに?』/マール・フェレーロ・画, フェリシティ・ブルックス・文, 石津 ちひろ・訳/化学園文化出版局/2019. 4/¥1600/(絵本)
	小低	『いぬのサビシー』/サンディ・ファッセル・文, タル・スワナキット・絵, 青山 南・訳/光村教育図書/2019. 11/¥1400/(絵本)
	小低	『とんでいったふうせんは』/ジェシー・オリベロス・文, ダナ・ウルエコッテ・絵, 落合 恵子・訳/絵本塾出版/2019. 9/¥1500/(絵本)
	小低	『夜のあいだに』/テリー・ファン・作, エリック・ファン・作, 原田 勝・訳/ゴブリン書房/2019. 6/¥1700/(絵本)
	小中	『介助犬レスキューとジェシカ 人生をかえた友情の物語』/ジェシカ・ケンスキー・文, パトリック・ダウネス・文, スコット・マグーン・絵, よしい かずみ・訳, 日本介助犬協会・日本語版監修/BL出版/2019. 2/¥1500/(絵本)
	小高	『女と男のちがいで?』(あしたのための本)/プランテルグループ・文, ルシ・グティエレス・絵, 宇野 和美・訳/あかね書房/2019. 7/¥1800/(367. 1)

■動物が活躍するユーモラスな絵本

★	幼	『ロージーのひよこはどこ?』/パット・ハッチンス・さく, こみや ゆう・やく/好学社/2019. 7/¥1500/(絵本)
	幼	『あまがえるのかくれんぼ』(世界文化社のワンダー絵本)/たての ひろし・作, かわしま はるか・絵/世界文化社/2019. 5/¥1200/(絵本)
★	幼	『クマさんのいえへいかなくちゃ!』/ブライアン・リーズ・作・絵, 横山 和江・訳/徳間書店/2019. 1/¥1600/(絵本)
	幼	『ねことねこ』/町田 尚子・作/こぐま社/2019. 10/¥1000/(絵本)
	小低	『あいぼうはどこへ? ニューヨークのとしょかんにいる2とうのライオンのおはなし』/ジョシュ・ファンク・ぶん, スティーヴィー・ルイス・え, 金柿 秀幸・やく/イマジネーション・プラス/2019. 9/¥1600/(絵本)
	小低	『人形の家ですんでいたネズミー家のおるすばん』/マイケル・ボンド・文, エミリー・サットン・絵, 早川 敦子・訳/徳間書店/2019. 8/¥1600/(絵本)
	小低	『もりのおうちのきいちごジュース』/ハヤ・シェンハヴ・文, タマラ・リックマン・絵, 樋口 範子・訳/徳間書店/2019. 5/¥1600/(絵本)
	小低	『やぎのグッドウィン』(世界傑作絵本シリーズ)/ドン・フリーマン・さく, こみや ゆう・やく/福音館書店/2019. 10/¥1200/(絵本)

■絵に注目

★	小低	『ねこになりたい』/山口 哲司・作・絵/出版ワークス/2019. 6/¥1800/(絵本)
---	----	---

	小低	『おやゆびひめ』/アンデルセン・作, カンタン・グレバン・絵, 松井 るり子・再話/岩波書店/2019. 4/¥1600/(絵本)
★	小中	『ヒキガエルがいく』/パク ジオンチェ・作, 申 明浩・訳, 広松 由希子・訳/岩波書店/2019. 6/¥1800/(絵本)
★	小中	『くろはおうさま』/メネナ・コティン・文, ロサナ・ファリア・絵, うの かずみ・訳/サウザンブックス社/2019. 10/¥3500/(絵本)
★	小中	『ナイチンゲール』/アンデルセン・作, カンタン・グレバン・絵, 松井 るり子・再話/岩波書店/2019. 8/¥1600/(絵本)
★	小中	『おーい、こちら灯台』(評論社の児童図書館・絵本の部屋)/ソフィー・ブラッコール・さく, 山口 文生・やく/評論社/2019. 4/¥1600/(絵本)

■平和への願いを込めた絵本

	小低	『ルブナとこいし』/ウェンディ・メデュワ・文, ダニエル・イヌユ・絵, 木坂 涼・訳/BL出版/2019. 2/¥1500/(絵本)
★	小低	『字のないはがき』/向田 邦子・原作, 角田 光代・文, 西 加奈子・絵/小学館/2019. 5/¥1500/(絵本)
★	小中	『スイレンの花のように 平和をつなぐカンボジアの踊り子』/パスカル・ルメートル・作・絵, たかの ゆう・監訳, 長井 佑美・訳/汐文社/2019. 1/¥1800/(絵本)
★	小中	『やんばるの少年』(童心社の絵本)/たじま ゆきひこ・作/童心社/2019. 5/¥1600/(絵本)
★	小中	『焼けあとのちかい』/半藤 一利・文, 塚本 やすし・絵/大月書店/2019. 7/¥1500/(絵本)
	小中	『ヒロシマ 消えたかぞく A Family in Hiroshima: Their Vanished Dreams』(ポプラ社の絵本)/指田 和・著, 鈴木 六郎・写真/ポプラ社/2019. 7/¥1650/(絵本)
	小高	『父さんはどうしてヒトラーに投票したの?』(エルくらぶ)/ディディエ・デニクス・文, PEF・絵, 湯川 順夫・訳, 戦争ホーキの会・訳/解放出版社/2019. 7/¥1800/(234. 074)

■暮らし、今・昔

★	小低	『ミツバチだいすき ぼくのおじさんはようほう家』(科学シリーズ)/藤原 由美子・文, 安井 寿磨子・絵/福音館書店/2019. 5/¥1500/(絵本)
	小低	『ちいさな島のおおきな祭り』/浜田 桂子・文・絵/新日本出版社/2019. 5/¥1500/(絵本)
	小低	『しゅつどう! しょうぼうたい』/鎌田 歩・作・絵/金の星社/2019. 2/¥1300/(絵本)
	小低	『巨大空港』/鎌田 歩・さく/福音館書店/2019. 9/¥1500/(絵本)

	小中	『えほん東京』/小林 豊・作・絵/ポプラ社/2019. 3/¥1500/(絵本)
	小中	『絵本江戸のたび』(講談社の創作絵本)/太田 大輔・作/講談社/2019. 11/¥1600/(絵本)
	小中	『かえてきた竹間沢車人形 三芳町・伝統芸能をよみがえらせた町』(三芳町“よみ愛・読書”ふるさと絵本)/さげさか のりこ・さく, 代田 知子・監修/三芳町役場/2019. 1/¥1500/(絵本)
	小中	『ポリぶくろ、1まい、すてた』/ミランダ・ポール・文, エリザベス・ズーノン・絵, 藤田 千枝・訳/さえら書房/2019. 2/¥1500/(絵本)
	小中	『ドーナツのあなのはなし』/パット・ミラー・文, ヴィンセント・X・キルシュ・絵, 金原 瑞人・訳/廣済堂あかつき/2019. 6/¥1600/(絵本)

■伝記絵本

★	小中	『草木とみた夢 牧野富太郎ものがたり』/谷本 雄治・文, 大野 八生・絵/出版ワークス/2019. 3/¥1600/(絵本)
	小中	『ドラゴンのお医者さん ジョーン・プロクター は虫類を愛した女性』(世界をみちびいた知られざる女性たち)/パトリシア・バルデス・文, フェリシタ・サラ・絵, 服部 理佳・訳/岩崎書店/2019. 5/¥1600/(絵本)
	小高	『数字はわたしのことば ぜったいにあきらめなかった数学者ソフィー・ジェルマン』/シェリル・バードー・文, バーバラ・マクリントック・絵, 福本 友美子・訳/ほるぷ出版/2019. 1/¥1600/(絵本)

■地球・宇宙がステージ

	初	『くもとそらのえほん』(PHPにこにこえほん)/五十嵐 美和子・作・絵, 武田 康男・監修/PHP研究所/2019. 4/¥1300/(絵本)
★	小低	『みらいのえんそく』/ジョン・ヘア・作, 椎名 かおる・文/あすなろ書房/2019. 6/¥1400/(絵本)
	小低	『うちゅうじんはいない! ?』/ジョン・エイジー・作・絵, 久保 陽子・訳/フレーベル館/2019. 4/¥1400/(絵本)
★	小中	『月でたんじょうパーティーをひらいたら』/ジョイス・ラパン・文, シモーナ・チェッカレツリ・絵, 原田勝・訳, 縣 秀彦・監修/廣済堂あかつき/2019. 11/¥1600/(絵本)
	小中	『キュリオシティ ぼくは、火星にいる』/マーカス・モートン・作, 松田 素子・訳, 渡部 潤一・日本語版監修/BL出版/2019. 2/¥2500/(絵本)
★	小上	『エベレスト 命・祈り・挑戦』/サングマ・フランシス・文, リスク・フェン・絵, 千葉 茂樹・訳/徳間書店/2019. 7/¥2800/(292. 587)
	小上	『火山はめざめる』(科学シリーズ)/はぎわら ふぐ・作, 早川 由紀夫・監修/福音館書店/2019. 6/¥1500/(絵本)

■小さくても大きくても、命ってすごい

★	幼	『きょうりゅうのおおきさってどれくらい?』(かがくのとも絵本)/大島 英太郎・さく/福音館書店/2019. 4/¥900/(絵本)
★	小低	『いっぼんのきのえだ』/コンスタンス・アンダーソン・作, 千葉 茂樹・訳/ほるぷ出版/2019. 7/¥1600/(絵本)
★	小低	『ゾウ』/ジェニ・デズモンド・さく, 福本 由紀子・やく, 長瀬 健二郎・日本語版監修/BL出版/2019. 9/¥1700/(絵本)
★	小低	『ねこのずかん』(コドモエのえほん)/大森 裕子・作, 今泉 忠明・監修/白泉社/2019. 4/¥1000/(絵本)
	小低	『イワシ むれでいきるさかな』(かがくのとも絵本)/大片 忠明・さく/福音館書店/2019. 4/¥900/(絵本)
	小低	『われから かいそうのもりにすむちいさないきもの』(海のナンジャコリヤーズ)/青木 優和・文, 畑中 富美子・絵/仮説社/2019. 3/¥1800/(絵本)
	小低	『ぽっとんころころどんぐり』/いわさ ゆうこ・さく/童心社/2019. 8/¥1100/(絵本)
	小中	『うみどりの島』/寺沢 孝毅・文, あべ 弘士・絵/偕成社/2019. 4/¥1400/(絵本)
	小中	『ナマコ天国』/本川 達雄・作, こしだ ミカ・絵/偕成社/2019. 6/¥1600/(絵本)

■ABC絵本

	小中	『ABCうさぎ』/ワンダ・ガアグ・文・絵, 戸澤 柊・訳/文遊社/2019. 3/¥1800/(絵本)
	小中	『どうぶつABCえほん』/安江 リエ・文, 降矢 なな・絵/のら書店/2019. 1/¥1500/(絵本)

■復刊など

	幼	『ガンピーさんのドライブ 新版』/ジョン・バーニンガム・さく, みつよし なつや・やく/ほるぷ出版/2019. 3/¥1400/(絵本)
★	幼	『ロバくんのみみ』/ロジャー・デュボアザン・さく, こみや ゆう・やく/好学社/2019. 5(「ロバのロバちゃん」(偕成社1969年刊)の改題新訳)/¥1600/(絵本)
	小低	『父さんがかえる日まで』/モーリス・センダック・さく, アーサー・ビナード・やく/偕成社/2019. 12/¥2000/(絵本)

★	小低	『すきですゴリラ 新装版』/アンソニー・ブラウン・作・絵, 山下 明生・訳/あかね書房/2019. 1 / ¥1400/(絵本)
	小低	『やぶかのはなし』/栗原 毅・ぶん, 長 新太・え/福音館書店/2019. 4/ ¥900/(絵本)
	小低	『とりになったきょうりゅうのはなし 改訂版』(かがくのとも絵本)/大島 英太郎・さく/福音館書店 /2019. 2/ ¥900/(絵本)
	小中	『あみかけクジラ』(クジラむかしむかし)/川村 たかし・文, 赤羽 末吉・絵/BL出版/2019. 3 (実業之日本社1973年刊の再刊)/ ¥1600/(絵本)

■絵本の部■

一般社団法人 日本子どもの本研究会 絵本研究部 五十嵐 静江

■2019年の絵本

テーマや表現などに多様性、斬新さがあり、絵も美しく洗練されていると感じられる絵本が多数ありました。一方、幼児の絵本は、絵の可愛らしさや奇抜さで目を引いているものや、ありふれたストーリーのものも多く、魅力を感じる作品が少なかったように思います。また、言葉が多すぎる、あるいは文章が長すぎると感じる絵本もありました。文章量の多さで紹介することをためらってしまう本もあるため、もう少し短ければ、年齢が低い子どもたちにも楽しめるのではないかと思います。

近年、子どもの学習に役立てようという意図で作られた絵本も増えているように感じます。動物や宇宙をテーマとした絵本は、フィクションとノンフィクションが融合され、興味を惹かれるものが多くありました。平和への願いが込められた絵本も多数出版されており、絵本や児童文学以外の作家の作品も見られます。

また、長らく品切れや絶版となっていた絵本が数多く復刊されました。訳者や表紙の絵が変わったり、内容を改めた科学絵本の改訂版などもありますので、読み比べてみるとよいかと思います。

■繰り返しが楽しい幼い子の絵本

まず最初に紹介するのは、『あつい あつい』（福音館書店）です。「あつい あつい どこかに すずしいところは ないかな」と歩いてきたペンギンが、日陰を見つけました。「ああ すずしい」でもそれは、アザラシの影でした。「ぼくだって あついんだよ すずしいところを さがそうよ」次に2匹が見つけたのは、カバの影…。こうして次々に動物たちが増えていきます。影の正体を想像するのが楽しく、最後に動物たちがたどり着く場所も納得。暑そうな黄色を背景にタラタラと汗をたらしたり、見つけた日陰でダラッと涼んだり、絵も言葉も実感がこもっていてユーモラスです。「暑い」「涼しい」というのは、子どもたちにも体験のある感覚だと思います。まねっこ遊びが楽しめる絵本です。

続いて『ながーいはなでなにをするの?』（福音館書店）。2009年に月刊「ちいさなかがくのとも」（同上）として刊行された作品です。お母さんゾウと子どものゾウが、ながい鼻で、草を丸めて食べています。「みてみて とっても じょうずでしょう」と子ゾウは得意顔。お母さんは優しく見守ります。水を吸ったり、砂をかけたり、便利な鼻です。水に沈みそうになった時は、引き上げてくれます。幼い子どもたちはできることが嬉しくて、得意になって自慢します。そんな子どもの嬉しい気持ちが伝わってくる絵本です。

母と子の会話がとても楽しい『おつきさまひとつずつ』（童心社）。お月さまがきれいな夜、あこちゃんはおかあさんと手をつないでうちへかえります。「おかあさん、おつきさまが ついてくるよ」「あこちゃんが だいすきなのかもよ」 こんな会話、経験がある人も多いのでは。あこちゃん

の問いかけはさらに続きます。「なんきょくにも おつきさま あるの?」「アフリカにも おつきさま ある?」 実はあこちゃん、作者のお嬢さんの麻子さん。麻さんは、幼い時に母の長野ヒデコさんとこんな会話を交わしたそうで、40年余りの時を経て絵本になり、驚かれたことを童心社の小冊子「母のひろば」で述べられています。

■ストーリー展開が楽しい冒険絵本

『ワニをつかまえたこぎるのおはなし』(徳間書店)。ジャングルで暮らすサルの大家族。その中に小さな子ぎるがいました。ある日、一人で川辺にやってきた子ぎるは、ヤシの実をとろうとして、川に落ちてしまいます。そこへやってきたのは、大きなワニ。子ぎるはふるえながら、「それよりも、もっと ワニさんに ふさわしい、すごい ごちそうがあるよ。(中略) もってくるのを てつだってくれる?」と、ワニにつるの端をくわえさせ、森の奥に逃げて行きます。そして森の中で子ぎるが出会ったのは…。子どもたちは、知恵を出してピンチを切り抜ける子ぎるに自分を重ねてハラハラしたり、得意になったりするでしょう。最後も子どもにとって納得の終わり方だと思います。1949年にフランスで出版され、長く読み継がれてきた古典絵本です。

『アレックスとまほうのふね』(徳間書店)は30年前にアメリカで出版された、明るいタッチの絵で、のびのびと冒険が楽しめる作品です。ある日、お母さんがアレックスにほんものの船長さんのぼうしをくれました。そこでアレックスは、「せかいいち ゆうかな せんちょうに なって だいぼうけんしよう」と、お母さんと冒険ごっこをします。アレックスのお母さんは、きれいな声で歌えるし、クモだってこわがらないすごいお母さんなんです。2人は海をどんどん進み、島を見つけてますが、着いたとたん海賊たちがあらわれます。いすを舟に見立てて海に漕ぎ出す場面は、自然に空想の世界に入っていくことのできる、とてもよい絵だと思います。でも、個人的には、お母さんがちょっとがんばりすぎ?アレックスにもっと活躍して欲しかったです。

次に『アーサー王のひひひひまご』(瑞雲舎)。伝説の英雄アーサー王のひひひひひ孫のヘンリーは、誕生日の朝、ろばのナックルにまたがって冒険の旅に出かけます。火を噴くドラゴンに戦いを挑みますが、ドラゴンの吐いたのは火ではなく、煙のわか。 「ちからと ちからを ぶつけあって、たたかいたいんだ!」と叫ぶヘンリーに、ドラゴンは「ひとつ目の おおおとこ キュクロプスのところへ いって見たら?」と言います。そこでヘンリーは、キュクロプス、鳥の怪物グリフィン…と次々に戦いを挑んでいきますが、怪物たちはヘンリーを遊び相手としか見てくれません。やる気満々のヘンリーと、大きいけれどおっとりした怪物たちが対照的。どの場面でも小さなヘンリーと、巨大な怪物たち、そして背後の景色の広さとの違いが引き立ちます。勇敢なはずのヘンリーが、こわがって逃げ出す場面に、子どもたちは案外共感するかもしれません。

『かわうそモグ』(BL出版)。アオメとモグはかわうその兄弟です。ある日、兄さんのアオメにバカにされたモグは、ウナギをつかまえ、見かえしてやろうと川を下っていきます。人里に近づいたモグは、娘に化けてウナギ屋に入り込みますが、正体がばれて捕まり大ピンチ。このままではみそ鍋にされてしまいます…。モグのヤンチャぶりが子どもたちとも重なり、思いがけない展開にハラハラ。後半の絵はモグのピンチだけに、ドキッとさせる迫力のある絵です。

『ノロウェイの黒牛』(BL出版)は次々に展開するお話と、昔話の味わい深さを併せ持った絵本です。昔話なのでストーリーだけでも面白いのですが、絵本でなければ、なかなか出会えないのではないのでしょうか。ある日3人姉妹が、どんな人と結婚したいかを話します。上の娘は伯爵と、中の娘は男爵と結婚したいと言いますが、末の娘は「ノロウェイの黒牛でもいいわ」と3度も言います。こうして末娘は、迎えにやって来た黒牛の背中に乗り、旅に出ます。実は、黒牛は王子が魔法で変えられた姿。長い旅の途中で王子は元の姿に戻りますが、娘とは離れ離れになってしまいます。2人が結ばれるまでには、様々な困難が待ち構えているのでした…。黒や茶の暗い色調の重厚な絵で、お話の雰囲気がよく出ていると思いますが、娘と王子が可愛いのが、個人的には少し残念なところ。でも、子どもたちにとっては親しみやすいのかも知れません。

■子どもの遊びや日常を描いた絵本

このテーマからまず紹介するのは、『タコヤん』(福音館書店)。ある日、海からタコの「タコヤん」が、ノタコラ ペタコラしょうちゃんの家に行ってきました。そして、ドアをステテンテンとノック、「タコヤんです。あそびましょ」。しょうちゃんが断ってもドアの隙間から入ってきて、勝手にゲームを始めます。そのうまいこと、すごいこと。タコヤんは、サッカーもかくれんぼも上手です。みんなにほめられても、照れながら「それほどでも」と謙虚なタコヤん。でも、みんなが楽しく遊んでいると、大きな犬を連れておじさんがやってきます…。8本の足を使って全身で遊ぶタコヤんは、とても魅力のあるキャラクターです。色が溢れる絵本が多い中、色を絞った白地の絵本は、物語の世界に入りやすい気がします。

続いて『えらいこっちゃんのいちねんせい』(アリス館)。1年生になったばかりのぼく。時間割は、「べんきょう！ べんきょう！ べんきょう！ べんきょう！」そしてようやく、「きゅうしょく」。「べんきょうの じかんは べんきょうのことだけ かんがえる。」だけど、気が付くと外を見ています。そして居眠り、先生の「まきのくん おはよう！」の声に「ああ えらいこっちゃん。」休み時間は遊ばないうちにチャイム、給食だって早く食べられない。そのたびに「ああ えらいこっちゃん。」のつぶやき。明るいタッチの動きのある絵が、慣れない学校生活に振り回される1年生の奮闘ぶりをユーモラスに伝えてくれます。

初めて学校へ行くことに、不安を感じる子ども少なくないのではないのでしょうか。そんな子どもの気持ちに寄りそった『メイがはじめてがっこうへいくひ』(イマジネーション・プラス)。今日はメイが初めて学校へ行く日。でも、いろんなことが心配で行きたくありません。ママに引っ張られて学校へ着きますが、木に登って隠れてしまいます。そこへ、同じく学校に行きたくない女の子ロージーも登ってきます。さらには、女の人まで登ってくるのですが、実はその人は…。同じ1年生の絵本でも、先ほどの『えらいこっちゃんのいちねんせい』とは対照的です。こちらはちょっと深刻そう。とても不安なメイに、お母さんは「がっこうへ いったら たのしい ことが いっぱい あるのよ」。日本でもありそうな光景です。大人は励ましたくなりますが、共感するほうが子どもを元気にするようです。かわいらしい絵で、子どもたちの表情がとてもよいと思いました。

続いて、韓国からの絵本『チェックポ』(福音館書店)。「チェックポ」は、本を包む「ポジャギ」(小切れを縫い合わせた風呂敷状の布)です。オギは教科書を古いチェックポに包んで学校に通います。

お母さんは、秋に稲刈りがすんだら新しいものを買ってあげると言いますが、ランドセルを買ってもらった友だちのダヒが羨ましくてたまりません。チェックのことをダヒにからかわれ、大げんかになります。ふと、チェックを縫ってくれた優しいおばあちゃんの顔が浮かんでくるのでした…。韓国の多くの子どもたちがランドセルを買ってもらえなかった頃のお話です。田園風景がとても美しく、細かいところまで丁寧に描かれています。表情や動きから、人物の気持ちや人柄がよくわかります。今の子どもたちには、伝わりにくいストーリーかもしれませんが、人が自分のために一生懸命作ってくれたものを大切に思う気持ちは、変わらないように思います。

『コレットのにげたインコ』（偕成社）。新しい町に引っ越してきたコレット。ペットがほしいのに、飼わせてもらえません。がっかりしたまま家を出ると、男の子がふたり近づいてきます。「なにしてんの？」と聞かれ、コレットは思わず、ペットのインコをさがしていると答えてしまいます。男の子が友だちを呼び集め、みんなで探し始めますが、どんなインコか聞かれるたびに「青くて」「ほっぺが黄色で…」と、どんどん素敵なインコになっていきます。コマ割りのある細かい展開の絵、モノクロに近い絵に、コレットの服の黄色、インコのブルーなどの色が効果的です。インコのことを話すコレットの表情は、戸惑いながらも得意げになっていきます。子どもの心の中で、空想の世界が広がっていく様子を見るようです。最後、お母さんが呼ぶ声に、一瞬時が止まったようなコレットと子どもたちの表情が印象的でした。

■子どもの気持ち、戸惑いや頑張りを描いた絵本

『おれ、よびだしになる』（アリス館）。小さいころから相撲が大好きなぼくが、一番好きなのは「よびだしさん」。そして、5歳の誕生日に大相撲に連れて行ってもらうと、直接目にしたよびだしさんのかっこよさに、「おれ、よびだしになる」と決心。毎年、場所のたびにけいこを見せてもらい、中学を卒業すると、いよいよ本物のよびだしとして歩み始めます。よびだしは部屋に所属し、おすもうさんと寝起きを共にして、太鼓たたき、土俵づくりなどあらゆる業務をこなす仕事。モノトーンで描かれた大胆な構図と力強い絵が、相撲の世界とそれを支える裏方の仕事をよく伝えてくれます。表情から少年の真剣さや意気込み、それを見守る大人たちの温かさや厳しさなどが感じ取れます。懸賞幕や少年の衣装など、所々使われている彩色も効果的です。

『自転車ほしい！』（光村教育図書）。周りのみんなは持っているのに、自分だけ自転車を持っていないルーベン。友だちのセルジオは、誕生日に頼んでみたらと言うけれど、買ってもらえないことは分かっていました。そんなある日、ルーベンがスーパーのレジに並んでいると、女の人がお金を落としていきます。1ドルかと思いついたそのお金は、100ドル札。100ドルあれば自転車を買う！ルーベンの頭の中は自転車がいっぱいになりますが…。拾ったお金で自転車を買うということは、日本では考えにくいかもしれませんが、欲しいものがすぐ手に入る子と、我慢しなくてはならない子がいるのは、日本でも同じ。友だちに本当のことが言えなかったり、誘惑に負けそうになったりするのによくあることです。ルーベンの気持ちに、自分の気持ちを重ねる子もいると思います。絵はルーベンの気持ちや行動をよく表しつつも、深刻になり過ぎない軽さもあり、よいと思いました。

『ひみつのビクビク』（廣済堂あかつき）。少女の小さな秘密の友だち「ビクビク」。「ビクビクは

いつも そばにいて、わたしを まもってくれる。」 けれど、少女が「この国」にひっこしてくると、ビクビクは急に大きくなり、学校に行こうとすると押さえつけるようになります。少女は学校が嫌い。みんなの言葉がわからないし、彼女もみんなの言葉がわからないからです。移民の少女の不安がビクビクという存在で表されていますが、少女が男の子と遊んだことで、ビクビクは小さくなっていきます。誰もが体験する不安という感情を、見える形であらわした共感できる絵本です。

■いろいろな家族、いろいろなできごと

『なまえのないねこ』（小峰書店）。「ぼくは ねこ。なまえのない ねこ。だれにも なまえをつけてもらったことが ない」で始まる、ねこの視点でかかれた絵本です。靴屋のねこは「レオ」、本屋のねこは「げんた」、八百屋のねこは「チビ」。町のねこにはみんな名前がついています。「ぼくも なまえ ほしいな」「ぼく」は町を歩いて名前を探し始め、犬にも花にも名前があることに気付きます。「ぼく」は、グリーン目の美しいキジトラ柄の猫。寂しげで、すこし荒んでいて、まだ大人になりきっていないように見えます。「ぼく」とは対照的に、飼い猫たちは自信ありげで満足気。それを羨ましく思う気持ちが、どのページからも感じられます。登場する猫にはそれぞれ個性があり、表情も毛並みもよくて、撫でたいような気持ちにさせてくれます。表の見返しにたくさんの猫が描かれていますが、後ろの見返しにそれらの猫の名前も載っています。猫好きの作者らしい作品です。

『おにいちゃんとぼく』（光村教育図書）。「ぼく」のうちでは、なんでも置き場所が決まっています。使い終わったら、お兄ちゃんがわかるように、すぐ元の場所に戻さなくてはならないし、友だちのカルロスが遊びに来て、ビー玉遊びや戦いごっこはできません。自由に遊べて、ペットが飼えるカルロスがちょっと羨ましい。でも、ぼくのお兄ちゃんはずごいのです…。言葉では書かれていませんが、お兄ちゃんが目が見えないことが分かります。お兄ちゃんを中心とした暮らしぶりにちょっと不満を感じながらも、お兄ちゃんを尊敬する弟の気持ちと、目の見えない家族がいる家庭の様子が伝わってきます。

『マチルダとふたりのパパ』（岩崎書店）。転校生のマチルダがやってきて、パールは嬉しくてたまりません。マチルダは足が速いし、高い木に登れるし、どろんこ遊びも大好き。「わたしと そっくり！」と、パールはにんまりします。その上マチルダには、パパが2人いるのです。パールはパパと遊ぶのがすごく楽しい。そんな楽しいパパがふたりいるなら、楽しさも2倍のはず。でもマチルダの家に行ってみたら…。近年様々な形の家族の絵本が出版されています。2018年は『ふたりママの家で』（パトリシア・ポラッコ作 サウザンブックス社）が話題になりましたが、この本はパパがふたりの家庭です。同性婚の家庭も、普通の家庭と何も変わらないということを、2人の少女の交流を通して教えてくれます。難しいテーマですが、絵も言葉も元気いっぱい、とても楽しい絵本です。

『フォックスさんのにわ』（評論社）。フォックスさんと犬は離れたことがありません。一緒に遊んで、一緒におやつを食べ、一日中そばにいます。特に好きなのは庭仕事。フォックスさんには素晴らしい庭があります。ところがある日、思いもしなかったことが起きます。それをきっかけに、庭をめちゃくちゃに叩き壊してしまったフォックスさん。もう、二度と幸せいっぱいの庭にならな

いのなら、と気味の悪い庭に作り替えてしまいます…。フォックスさんは、キツネの姿をしていますが、人間そのもの。でも、その激しい感情も荒々しい行動も、キツネの姿だからこそ表現できて、読み手も素直に受け止めることができるのかもしれない。大切なものを失った悲しみから自然の力で立ち上がる姿が、胸をうちます。植物の持つ力が感じられる絵です。

質問に答える形で、構成・国籍・性別・暮らし方も異なる多様な家族を紹介した『かぞくってなあに？』（文化学園文化出版局）。最初の質問は、タイトル通り「かぞくってなあに？」。ページいっぱいにはたくさんの家族が描かれ、「もしかしたら こうだったり」「こんなふうだったり」と、少しだけ言葉が添えられています。肌の色の違う3人家族、男性ふたりのカップル、車いすの女性を囲む家族…。絵を見ながら、どんな家族か想像をふくらませることができます。「かぞくのかたちいろいろ」「かぞくのきもち」など、家族を様々な側面から取り上げ、「両親が別の町に住んでいる子」「住む場所がなくて、友だちの家に住んでいる家族」など、少しつらい家族についても触れています。絵は明るく楽しいイラストで、画面ごとに構図に工夫が見られます。内容はシンプルですが、様々な家族がいることを知るきっかけづくりになる絵本です。

■動物が活躍するユーモラスな絵本

『ロージーのひよこはどこ？』（好学社）。めんどりのロージーの生んだたまごがかえりました。でも、「あれ？ いない！」。ひよこを探してまっしぐらに進むロージーは、後をついてくるひよこや、ひよこを狙っている猫、魚にも気づきません。前作『ロージーのおさんぽ』（偕成社、2003年6月刊）に登場したキツネもいます。ひよこを狙っているのでしょうか。のんきもののロージーもちょっと変わったみたいです。子どもをさがすロージーの目は真剣で、お母さんらしさが出ています。ロージーが気づかないことを自分は知っている、という優越感を読み手が味わえる絵本です。最後にキツネが何をしていたかが分かりますが、それが予想外で嬉しくなります。

『クマさんのいえへいかなくちゃ！』（徳間書店）。ある寒い冬の日のこと。シマリスはクマから「おねがい、すぐにきて！」という手紙をもらいます。「なにかこまっているのかも」と家を出ますが、降っていた雪が積もり始め、前に進めなくなってしまう。そこへハイイロリスが現れ、シマリスを背中に乗せて運んでくれます。動物たちの助けを借りて、クマの元に駆けつけたシマリスを待ち受けていたのは…。ストーリーはとてもシンプルですが、苦労して突き進んでいく様子は、迫力があります。それぞれの動物が、とても丁寧に力強いタッチで描かれています。ガラス玉のようにも見える動物たちの目が印象的ですが、擬人化され、やや硬い印象を受けるこの絵には合っているのかもしれない。

■絵に注目

「ある朝、目がさめたらねこになっていた…」で始まる、不思議な話『ねこになりたい』（出版ワークス）。「まあ、とりあえず落ち着こう」と思っていると、白猫があらわれます。後をつけて扉をぬけると、タンポポ、そしてレンゲ畑が広がっています。次々に広がる水田、海、屋根並みの風景。季節も春から、夏、秋へと移り変わっていきます。綿麻混合の布に手描き染めした「手染め絵」で描かれた絵は柔らかく、美しい風景の中に引き込んで、ゆったりと満たしてくれるようです。

表紙に、こちらを見据える迫力のあるヒキガエルの顔が描かれた『ヒキガエルがいく』（岩波書店）。冒頭4ページにわたって描かれた静かな山並み。さらにページを開くと、見開きの左上にヒキガエルが現れます。絵のない右ページには、「トン」の2文字。次場面では、ヒキガエルは右ページに進み、こちらに近づいてきたように感じます。左ページには、取り残されたように「ト トン」の文字。そこからは、ページを開くごとにヒキガエルの数が増え、どこかへ突き進んで行きます…。個人的には、ヒキガエルは苦手ですが、それでも絵に魅せられ、そのエネルギーに圧倒されました。描かれたヒキガエルはリアルですが、背景は画面ごとに構成も素材も異なり、流れを作っています。文は、太鼓の音で表現されています。もともと、この絵本には文章があったことが最後のページで触れられています。

『くろはおうさま』（サウザンブックス社）は、真っ黒な画面に樹脂インクで絵が印刷された、さわって感じることのできる絵本です。描かれているのは、目の見えないトマスが感じている色の世界。「きいろは からし。ぴりりと からいけど、ヒヨコのはねみたいに ふわふわ。」そして風に舞う羽が描かれています。真っ黒な画面に黒で描かれたふくらみのある絵、つややかでとても美しいです。文字は銀色のインクで書かれ、点字もついています。色を表現する言葉は、どれも詩のようです。目の見える人には、目の見えない人が色をどのように感じているか想像できませんが、本書では「トマスは どのいろも みんな だいすき。きいたり におったり さわったり あじわったり できるから。」と表現されています。原書は14年前にメキシコで出版され、多くの言語に翻訳されています。当初、日本では出版されませんでした。クラウドファンディングを活用して世界の本を翻訳出版しているサウザンブックスが資金を募ったところ、約400万円が集まり、出版が実現したそうです。黒の美しさ、触る感覚、色を感じる言葉など、豊かな体験ができる絵本です。（サウザンブックスHP <https://greenfunding.jp/thousandsofbooks/projects/2416> 最終確認日2020年6月1日）

『ナイチンゲール』（岩波書店）は、アンデルセンの童話の中でも珍しい、中国を舞台にしたお話です。「夜うぐいす」とも呼ばれる鳥ナイチンゲール。その美しい歌声に心を打たれ、涙を流した皇帝は、鳥を自分の城に置くようになります。しかし、宝石で飾られた機械仕掛けの鳥がやってくると、人々はそちらに夢中になってしまいます…。中国風に描かれた独特の雰囲気を持つ絵が美しい作品です。前半は、落ち着いた色調と繊細なタッチで、作り物の鳥が現れる後半は、衣装も色使いも鮮やかになり、雰囲気が一変します。城の人々が操り人形で描かれていたり、死神が京劇の悪役の様相をしていたりと、中国の文化を取り入れて表現されています。表紙には中国、日本、西洋が混じり合ったような衣装を身に着けた3人の貴婦人が描かれていますが、物語の中の一場面でも同じ構図が使われています。しかし、中央のナイチンゲールが一方は本物、一方は機械仕掛けであることには気づかないかもしれません。エキゾチックで美しい絵とお話を味わってください。

世界のさいはての小さな島の灯台守一家の暮らしを描く『おーい、こちら灯台』（評論社）。ある日、小さな島の灯台に1人の灯台守がやってきます。灯りをともし続けるため、たった1人働き続ける灯台守。奥さんへの手紙をビンにつめて海に流すと、間もなく奥さんがやってきます。灯台の中は明るく彩られ、生き活きとしてきます。奥さんのドレスは明るい色と可愛い花柄で、温かい家庭を象徴しているようです。やがて男の子が誕生し…。表紙には白い壁と赤に塗られた灯台が

凜と立っています。海も空も深いブルーで引き込まれるようです。見返しから始まって、どのページを見ても美しく、描かれる波も浮世絵を思わせる荒々しいものや、光を受けて輝くさざ波まで、同じものはありません。特に楽しいのは、奥さんが出産を控えた場面。ふたりの幸せが強く感じられます。文章は似たフレーズがところどころ繰り返され、詩のようです。後の見返しに書かれた「灯台について」の文章からは、灯台の知識だけでなく、この絵本に込められた作者の思いが伝わってきます。ブラッコールはこの絵本で、2度目のコールデコット賞を受賞しています。

■平和への願いを込めた絵本

『字のないはがき』(小学館)。戦争が激しくなり多くの子どもたちが田舎へ疎開する中、向田家の小さな妹も、とうとう疎開先へ向かうことになりました。お父さんは、字の書けない妹のために、たくさんのはがきに自分の住所と名前を書き、元気な日には、はがきに丸をかいてポストに入れるよう言います。最初のはがきには、はみ出すくらい大きな丸が書かれています。丸はだんだん小さくなっていきます…。本作品では、わずかに足が描かれているだけで人物は描かれず、下駄やはがきの束、大小のかぼちゃなど様々な物が大胆な構図で配置され、そこから妹への熱い思いが伝わってきます。向田邦子がエッセイで綴った実話が、角田光代によって子どもたちにもわかる言葉に書き換えられ、シンプルな絵の印象深い作品となっています。

『スイレンの花のように』(汐文社)は、1970年から続いたカンボジアでの内戦について描いた作品です。戦争と強制労働という過酷な状況の中で、深く傷ついた少女ソピリンが古典舞踊を学び、優れた舞踊家となって踊りを伝え続けていく伝記絵本です。カンボジアの民話や古典舞踊のポーズを紹介するページが全体の半分ほどを占めたり、最初と最後に踊り手のモノクロの写真があったりと、変わった構成になっています。踊り手の写真はとても美しく、絵は素朴ですが、物語とも合っているように感じました。サブタイトルに「平和をつなぐカンボジアの踊り子」とあるように、踊りに込めた平和への願いが伝わってきます。

『やんばるの少年』(童心社)。この森にしかない珍しい生き物がたくさん棲むやんばるの森は、ぼくと弟とハルコの遊び場。ところが、オスプレイが発着するヘリパッドが作られることとなります。ハルコのおじいさんはダンプカーの前に立ちはだかって反対し、ハルコは「わたしたちの森をこわさないでください」という紙を持って毎日道端に立ちます。しかし木々は倒され、川には泥水が流れ込んできました…。初めは、自然いっぱいの森で子どもたちが遊ぶ楽しい場面で始まりますが、次第に沖縄のオスプレイの問題を描いていることが分かってきて、そのあまりのギャップに驚かされます。大胆なタッチの絵が、森の豊かさや戦争の醜さ、オスプレイへの恐怖を伝えてくれます。多くの人に絵本を見てもらい、沖縄の人たちの苦しみを理解してほしいという作者の思いが伝わってくる絵本です。

『焼けあとのちかい』(大月書店)。『日本のいちばん長い日』(文藝春秋)などで著名な作家、半藤一利の実体験を描いた絵本です。東京の下町・向島生まれの少年一利は、毎日まっ黒になりながら遊び転げる元気な少年でした。しかし、小学5年の時にアメリカとの戦争が始まります。先生たちは「日本は絶対に勝つ」と自信ありげに言いますが、生活は苦しくなるばかり。度々アメリカ軍の空襲を受けるようになり、昭和20年3月、大空襲が東京を襲います。少年は川に飛び込み、九

死に一生を得ますが、東京は焼け野原となり、10万人もの人々がなくなりました。実体験だけに空襲の恐ろしさがリアルに伝わってきます。生と死は紙一重であることを実感させられます。最後のページに現在の著者の姿と、焼け跡で誓った言葉がしっかりと描かれています。一人一人がしっかりと受け止めた言葉です。

■暮らし、今・昔

『ミツバチだいすき』（福音館書店）は、小学生のぼくが、養蜂家のおじさんの手伝いをしながら、ミツバチについて学んでいく科学絵本。春に近いある日、ぼくが養蜂場に行くと、たくさんの木箱が並んでいて、たくさんのミツバチが出入りしています。女王バチは1日にたまごを1000個も生みます。そして、桜が散る頃までに群れはどんどん大きくなり、1段だった木箱は2段になります。ミツバチは蜜だけでなく、幼虫のために花粉も集め、花々も、めしべに花粉を付けてくれるミツバチを待っています。初めての体験に驚いたり、ワクワクしたりするぼくの様子が描かれている一方で、ミツバチが元気で暮らせるよう、気を配っているおじさんの様子も垣間見えてきます。絵は様々な視点から描かれ、養蜂の様子やミツバチの生態、不思議さが伝わってきます。六角形がびっしり組み合わさった巣にハチが群がる姿はとても丁寧に生き生きと描かれ、美しさを感じるほど。ゆっくり味わってほしい絵本です。

■伝記絵本

「日本の植物学の父」とよばれた、牧野富太郎の伝記絵本『草木とみた夢』（出版ワークス）。明るいタッチの絵とストーリーで、物語のような楽しさがあります。江戸時代の終わりごろ、高知県のある村で生まれた富太郎は、幼いころから草や木が大好きでした。12歳の時、村に初めて小学校ができますが、授業は寺小屋などで学んで知っていることばかり。2年生で学校をやめてしまいます。しかし、教室にあった「博物図」は常に富太郎の心を捉え、いつか自身もそういうものを作りたいと思うようになります。明治初期という時代、日本中の植物がわかる本をつくりたいという富太郎の夢は本当に難しい挑戦でした。でも、富太郎のそばには、同じ夢を持つ植物好きの師や仲間、そして支えてくれる妻がいました。夢が一步一步叶っていく様子を見るのは、読み手にとっても嬉しいことです。子どもたちには馴染みのない人物ですが、美しく優しいこの絵本を通して、こんなにも草木を愛した人がいたことを知って欲しいと思います。

■地球・宇宙がステージ

『みらいのえんそく』（あすなろ書房）。「つきに ちゃくりく！」。子どもたちが、先生に引率され、地球が見えるところに向かいます。初めて地球を見た子どもたちは大喜び。でも、一人だけずわって絵を描いているうちに居眠りしてしまった子がいます。気が付くと置いてけぼり。しょうがないので、また絵を描き始めました。すると誰かが覗き込んできました。振り向くと…。月に遠足なんて、ちょっとワクワクします。宇宙は真っ黒、月は灰色、宇宙服は白という、ほとんどが黒と白で描かれた絵の中で、地球の青とカラフルなクレヨンの色が引き立ちます。主人公だけが知っている楽しい展開を、子どもたちも一緒に楽しむことでしょう。

『月でたんじょうパーティーをひらいたら』（廣済堂あかつき）。月でたんじょうパーティーをひらいたら、どんなことが起こるでしょう。まずはロケットの中。宇宙空間では、体はぶかぶか浮き

上がり、上も下もありません。トンガリぼうしやケーキ、ジュースも一面に浮かんでいます。そして月の表側に降りてみると？月でなら、夜の間もぼんやり明るいし、青い地球がいつも見えています。そして、ボールを投げたり打ったりすると、地球の6倍も遠くへ飛んでいくし、地球ではできない色々なことができます。パーティーをしながら、実際に動き回ることをイメージしてかかれていますので、楽しみながら科学的な知識がたつぷり得られます。近い将来実現するのでは、と思われてきました。

『エベレスト』（徳間書店）。およそ5000万年前、ヒマラヤ山脈が誕生しました。その中で最も高い、世界一の山がエベレストです。サブタイトルに「命・祈り・挑戦」と添えられているように、様々な視点からエベレストの偉大さと魅力を描いています。「命」。麓には、そこにしか見られない動植物が多数生息、今もたくさんの新種が発見されています。3000mを超えると、植物も動物も、厳しい環境に負けないものだけが生き抜くことができます。続いて「祈り」。エベレストは聖なる山として崇められ、人々は祈りを捧げます。いくつもの伝説が紹介されています。そして「挑戦」。1921年からエベレスト登頂への挑戦が始まり、1953年に初登頂を果たしました。登頂にはシェルパの存在は欠かせません。シェルパは山を知り尽くしているだけでなく、薄い空気でも呼吸ができる心肺能力を持っています。落ち着いた色使いと緩やかなタッチの絵で、絵本だからこそ味わえる、エベレストの世界に引き込んでくれます。

■小さくても大きくても、命ってすごい

子どもたちは恐竜が大好きです。「もし きょうりゅうが いまでも いきていたら…… おおきさは どれくらいかなあ?」。そんな好奇心を満足させてくれる絵本『きょうりゅうのおおきさってどれくらい?』（福音館書店）。公園にトリケラトプスがいたら、その大きさはジャングルジムと同じぐらい。ティラノサウルスが道路に座ったら、バスと同じ大きさです。子どもたちが恐竜と遊んでいる様子も描かれ、大きさを実感でき、身近に感じられます。月刊「かがくのとも」（福音館書店、2013年3月号）をハードカバー化したものですが、新たな発見により、シノサウロプテリクスが修正されています。国立科学博物館の真鍋真博士に学術的なアドバイスを受けています。本作品で描かれている街は、栃木県小山市です。読んでいてとても楽しくなる絵本です。

「さいしょは ただの きのえだ だった」という一文で始まるのは、『いっぽんのきのえだ』（ほるぷ出版）。その1本の木の枝は、ゾウのハエたたきになり、ゴリラのつえになり、チンパンジーのスプーンになり…。動物たちが木の枝を様々な道具として使うことに驚き、興味をそそられます。同じ1本の枝が、動物から次の違う動物へと、バトンタッチされていくかのように描かれています。その部分はもちろんフィクションですが、それによって展開がスムーズになり、物語のように親しみやすくなっています。表紙と見返しのグリーンがとても美しく、動物の絵はリアルですが、背景や子どもたちは様々な画材や画法が用いられ、場面ごとに特徴が見られます。最後に少し詳しい解説がありますが、それも面白いです。

『シロナガスクジラ』『ホッキョクグマ』（2冊ともBL出版）に続く、デズモンド作の3冊目の動物絵本『ゾウ』（同上）。前作同様、男の子が案内役を務めています。ゾウは、陸上でいちばん大きなほ乳類。頭も記憶力もとても良く、何年も前に見つけた食べ物や水のある場所を覚えているそ

うです。また、足の裏がとても敏感で、10km離れた場所の振動も感じ取れるとのことなど、驚かされる様々な知識が満載。ゾウはリアルに描かれ、大きさや体重、動きなどの場面では、男の子がいろいろなものと比較し、ユーモラスに紹介しています。ゾウの生態や暮らしぶり、現在置かれている状況など、楽しく読みながら学べる、優れた科学絵本です。

『ねこのずかん』（白泉社）はタイトル通り、ねこの図鑑ですが、絵本感覚で楽しめる1冊。ねこの体や顔、種類など、外見的なことだけでなく、暮らし方なども紹介されています。最初のページは、「ねこと なかよく なりたいかい？」「それなら、ねこに あいにいこう！」。十数匹のねこが、思い思いの格好をしてくつろいでいます。よく見かける動作で、親しみを感ずみます。「ねこのかお」では、顔のもようや目の色にも注目。特に楽しいのは、「ねこご」のページです。しっぽの動きやしぐさ、なき声で、たくさんの言葉をしゃべっている様子を紹介しています。ねこと暮らしている人なら、特に分かるかもしれません。小型本ですが、内容がとても充実しています。現在、作者は4匹の猫を飼っているそうです。

■復刊など

『ロバくんのみみ』（好学社）。1969年に偕成社から出版された『ロバのロバちゃん』（くりやがわけいこ訳）の改題・新訳です。ロバくんは小さくて陽気なロバ。ある日、水に映った自分の姿を見て、長くてピンと立った耳がだらしがないと思い込み、友だちの動物たちに相談します。犬は、たらしたほうがいいと言い、羊は横についているほうがいいと言います。誰もが自分の耳が一番いいと思っているのです。ロバくんはみんなの耳を一生懸命まねてみますが、笑われるだけ…。大人はユーモラスに感じますが、子どもたちは心配したり、ハラハラしたりするのではないのでしょうか。4・5歳児にぴったりの絵本です。前訳との大きな違いは、「ロバちゃん」という呼び方が「ロバくん」になったことです。原作は“he”なので「ロバくん」にしたとのことですが、呼び方でちょっとお兄さんになったような気がします。

最後に紹介するのは、『すきですゴリラ』（あかね書房）。ハナはゴリラが大好き。でも、まだ一度も本物のゴリラを見たことがありません。忙しいお父さんは、ハナを動物園に連れて行ってくれません。誕生日のプレゼントはゴリラにしてって頼んだのに、置いてあったのはおもちゃのゴリラ。ところが真夜中、おもちゃのゴリラが本物になり…。前半はハナの孤独な心の内が、絵によって表現されています。無機質で寂しいテーブル、ハナを見ようしない父親、檻のような大きなベッド…。ゴリラが現れてから雰囲気は一変します。ハナの理想の父親のようなゴリラ。動物園、映画館、そして、前半の絵とは対照的な温かいテーブル。ハナの表情は見えませんが、満たされているのを感じます。旧版との主な違いは「表紙の絵」「サイズ」「絵の縁取りの有無」。旧版の表紙は、枝にぶらさがっているハナとゴリラの全身が描かれており、背景は夜の街並みと満月です。新装版では、ハナとゴリラの上半身、背景は数個の小さな星のみ。旧版の絵は、物語の内容に一致していますが、少し硬い印象です。新装版ではハナが若干幼く見えるものの、ハナとゴリラが横目で見つめ合う温かい雰囲気です。手に取りやすくなったような気がします。とてもよい絵本ですので、旧版を所蔵していても、ぜひ新装版も図書館等に置いて欲しいと思います。

(了)